

<推奨コース>

Aコース 青木繁ゆかりの地めぐり [距離] 約1.5km [所要時間] 徒歩約30分



<おすすめスポット>



5 龍樹院(りゅうじゅいん)

曹洞宗の寺院。向拝の龍の彫刻は、江戸時代末の後藤流彫刻師、後藤恒徳によるもの。境内には文政4年(1821年)の二十三夜塔などがある。



6 布良崎神社(めらさきじんじや)

布良崎神社は近代社格制度にて諸社(民社)では一番位の高い藩社(県社)につぐ「郷社」になります。この小さな部落に郷社が存在することは非常に珍しく、当神社が現在の官幣大社である安房神社の前殿であること、深い関係があると言われています。



6 青木繁 逗留の家・小谷家(あおきしげる とうりゅうのいえ・こたにけ)

館山市布良(めら)は、明治の洋画家、青木繁が代表作「海の幸」を描いた場所として知られています。1904(明治37)年の夏、東京美術学校を卒業した青木は、画友の森田恒友、坂本繁次郎、そして恋人の福田たねと制作旅行にこの地にやって来ました。漁家・小谷家に約2か月近く滞在し、布良の海を題材に、数多くの海の景色を描きました。青木繁らが滞在した民家は当時のままの姿で、現在の当主が住まいとして守っており、明治二十年代の網元の住宅としても貴重な文化財。こうした小谷家住宅と「海の幸」記念碑は、館山市民にとっての誇りであると同時に、わが国にとっても貴重な文化遺産であり、今なお風光明媚な布良の漁村風景や、全国の多くの美術愛好家に「海の幸」誕生の地をアピールしています。



8 青木繁「海の幸」記念碑(あおきしげる「うみのさち」きねんひ)

1904(明治37)年の夏、東京美術学校を卒業した青木は、画友の森田恒友、坂本繁次郎、そして恋人の福田たねと制作旅行にこの地にやって来ました。布良(めら)を訪れた青木は、漁家・小谷家に約2か月近く滞在し、布良の海を題材に、数多くの海の景色を描きました。その中で最も力を注いだのが、裸の漁夫数人が大きなフカ(サメ)を背にして夕日を浴びて戻ってくる、有名な油彩画「海の幸」でした。「海の幸」はその年の秋、白馬会展に出品され、日本に初めて、日本人の油絵が生まれたと評されたといわれています。布良の豊かな自然の中で描かれた「海の幸」は、青木繁の名を日本美術史上不動のものにしました。1962(昭和37)年、福田たねと青木繁の遺子幸彦(福田蘭童)の手により、この記念碑の除幕式が行われました。



9 布良浜(阿由戸の浜)(めらはま(あゆどのはま))

阿由戸の浜は、布良崎神社の祭神天富命が忌部氏を率いて上陸した海岸とされています。沖合の布良瀬は古くから好漁場として知られ、浜を見下ろす小高い丘には幕末の砲台や、海軍の望楼などが置かれました。明治期には天才画家青木繁が訪れ名作「海の幸」を描いています。



13 安房節記念碑(あわぶしきねんひ)

江戸期からの鮪延縄漁は、明治期には大型船(ヤンノー船)の操業により、富崎村は賑わったといわれています。操業される冬場には遭難事故が相次ぎ、そのなかで安房節が歌い継がれていきました。平成5(1993)年、先人の偉業を後世に伝えるため地域の人々が建立しました。



19 蓮壽院(れんじゅいん)

浄土宗の寺院で、境内に元禄16年(1703年)に発生した房州沖地震の犠牲者供養塔があります。この大地震で、この村の86名の人々が津波による被害をうけました。『諸色覚日記』という名主の記録によると、現在の寺は正徳4年(1714年)に村の伊右衛門という人たちが願いで、津波の跡地に村の寺として再建されたことがわかります。



20 相浜神社(あいはまじんじや)

江戸時代には、感満寺という修験の寺院があった場所。その後波除神社となり、大正年間に楯取神社を合祀して相浜神社となった。境内には、江戸時代の石灯笼や手洗石のほか、5個の力石がある。五十貫目のものには「深川不動丸船頭 西宮伝七奉納」とある。